

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名 杉山 智子

本論文は、施設入所中のアルツハイマー型痴呆症をもつ高齢者とケアスタッフとの 1 対 1 の言語的コミュニケーション場面の観察を通し、効果的な言語的コミュニケーションの特性を重症度別ならびに BPSD (痴呆の行動・心理症状 : Behavioral and Psychological Symptom of Dementia) の観点から明らかにしたものである。本研究は、特別養護老人ホーム痴呆棟またはグループホームの計 3 施設いずれかに入所し、アルツハイマー型痴呆症と診断、かつ、Functional Assessment Staging (FAST) で Stage 3-6 に該当すると判定された高齢者 26 名 (以下、利用者) と利用者にケアを提供するケアスタッフ 45 名とした。データ収集は、認知症ケアの経験をもつ調査者 1 名による参加観察法、記録物からの転記ならびにケアスタッフへの自記式質問紙調査・情報の聴取により実施した。評価指標は、各観察場面終了時の認知症高齢者の表情を測定するために Lawton の Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale を用いた。なお、本研究では、観察場面終了時にそれぞれ positive affect (楽しみ, 関心, 満足) が観察された場面で効果的な言語的コミュニケーション, negative affect (抑うつ, 不安, 怒り) が観察された場面で非効果的な言語的コミュニケーションが行われたと判断した。内容分析と統計学的分析を行い、以下の結果を得ている。

1. 効果的な言語的コミュニケーションの特性として、本研究のケアスタッフによる言語的コミュニケーション技術は、先行研究で示された言語的コミュニケーション技術 13 項目 (『的確な言葉を使って繰り返す/リフレージング』, 『説明・確認』, 『日常会話』, 『絵や物品を使用し, 具体的な会話を示す』『直接性 (direct)』, 『呼名』, 『実施ケアや各々の活動開始時のアナウンス』, 『生活歴の配慮』, 『自己紹介』, 『肯定的雰囲気』, 『closed-ended の質問』, 『ユーモア』, 相手の行動と同調する『ミラーリング』, 認知症高齢者と共同する『パートナーシップ』) の他に 9 項目が見出された。9 項目の言語的コミュニケーション技術は、『敬語』, 『賞賛』, 『依頼』, 『提案』, 『譲歩』, 『激励』, 『転換』, 『関係作り』, 『利用者自身に関する話をする』であった。
2. 効果的な言語的コミュニケーションの特性を重症度別に比較した結果から、Stage 3

[別紙 2]

では、ADL も比較的保持されており、関係作りや日常会話、賞賛などが多く観察されたことからコミュニティ形成への促しや高齢者の自尊心や尊重の保持に努め、生活に重点を置いたかかわりが重要になると考えられた。Stage4 は、Stage3 と比較すると効果的な言語的コミュニケーションの構成がほぼ一致していたが、直接性や説明・確認という言語的コミュニケーション技術が、観察場面の半数以上を占めていた。したがって、Stage3 と同様に生活に重点を置くことと同時に、直接的かつ具体的にコミュニケーションをとることが重要であると考えられた。Stage5 は、Stage3、Stage4 と異なる言語的コミュニケーション技術を多く用いていた。また、Stage3 や Stage 4 に比較し、BPSD の出現頻度が多くなり、譲歩や説明、転換を重視したコミュニケーションの実践が示された。Stage6 は、パートナーシップや的確な言葉を使って繰り返すコミュニケーション等が多く観察されたことから、常に安心や安定を与える言語的コミュニケーションに重点を置くことを意識したかかわりが重要になると考えられた。

以上、本研究では、無線送受信機を使用した参加観察法により、認知症高齢者の表情を評価指標として分析を行い、専門職のかかわり方を明らかにした点に独創性が認められる。また、重症度や BPSD 等の症状によってケアスタッフが用いる言語的コミュニケーション技術が異なり、ケアスタッフは、認知症高齢者の重症度毎にコミュニケーションを使い分けていることを初めて明らかにした。この知見は、認知症高齢者の重症度や BPSD に応じて、言語的コミュニケーションを使い分ける必要性を提示した点で臨床実践の上でも有用性が認められる。したがって、本論文は、ケアスタッフの対人サービス技術を明らかにし、今後の認知症高齢者のケア実践において重要な貢献をなすと考えられる点で、学位の授与に値するものと認められる。